



日本神経学会●監修
「パーキンソン病治療ガイドライン」作成委員会●編

パーキンソン病治療ガイドライン 2011

書評者

望月 秀樹（北里大教授・神経内科学）



パーキンソン病治療は、10年前と比較しても多くの薬剤が使用できるようになり、薬剤選択の上でいろいろな工夫が可能となったため、患者ADLも上昇している。一方で、パーキンソン病の治療薬は、ほとんどの薬剤が神経系に作用するという性質上、副作用も多く、進行期には薬剤量や種類が増加するため、治療の選択が難しいと考えられている。そのため、エビデンスに基づいた治療の指針を提示することで、標準的な治療を開始できるように、2002年日本神経学会から初めてパーキンソン病の治療ガイドラインが作成された。そして今回、2011年版のパーキンソン病治療ガイドラインがついに出版された。前ガイドラインの良い点をそのままに残し、さらに分かりやすく、実地で使いやすいように工夫されたガイドラインである。

前との大きな変更点は、各論部分をクリニカル・クエスチョンと題し、臨床上的具体的な質問に答えるという形式になっていることで、大変実践向きになっている。治療法で難渋することが多い非運動症状については、14項目で48ページも割かれており、治療法、対処法が細かいところまで記載されている。パーキンソン病のアパ

シー、疲労についての治療法や対処法など、他ガイドラインには書かれていないような内容まで網羅されており、臨床の場で重宝することは間違いなく、神経内科外来にはぜひ置いておきたい一冊である。

2002年版では治療のアルゴリズム（未治療時）が一人歩きして、利用者に誤解を生むことがあったとも言われているが、今回の改正では脚注を入れることで、できるだけ個々の患者に対応できるように工夫されている。未治療パーキンソン病の治療決定をするときには、患者一人一人の重症度や合併症、あるいは社会的状況をふまえた上で、このガイドラインを基に、患者のニーズに対応できるようじっくりと説明し、治療を決定するのが良いだろう。

また、エビデンスを示すガイドラインになると、どうしても引用論文が増えてページが厚くなってしまいが、それを減らすべく巻末に主要な引用文献のみを記載し、参考にした二次資料としてPubMedや医中誌の検索法が記載されているのがうれしい。

驚いたのは、現在日本未発売でこれから使用が可能となる薬剤の紹介もされていることである。具体的には、

rotigotine, rasagiline, リバスタグミンなどの記載があり、安全性、有効性が海外の論文を基に示されている。新しい薬剤の使い始めには、海外の情報は意外と少ないものだが、本ガイドラインにはしっかりと記載がされているので、今後使用する時の参考になる。遺伝子治療の項目も将来の治療として新たに付け加えられた。遺伝子治療は、われわれがすぐに選択できるわけではないが、海外・日本での臨床結果が紹介されており、新たな治療法の可能性を示している。

海外では、本ガイドラインに記載されている以外にもすでに使用されている薬剤もあり、これから新しい抗パーキンソン病薬が使用できるようになるであろう。その度に、新しい治療法が追加され、われわれはその治療効果や新たな副作用に注意しなければならぬ。次回の改訂までに使えなくなる薬剤もあると思われるので、本ガイドラインも今後は、少し早めに改訂することを検討していただきたいと思う。

B5 頁220 2011年 医学書院刊
定価 5,460円（本体5,200円＋税5%）
[ISBN978-4-260-01229-4]